

2018 年 4 月 8 日（日）「教会の礎／人生の基礎」

マタイ 16:13-20

13 さて、ピリポ・カイザリヤの地方に行かれたとき、イエスは弟子たちに尋ねて言われた。「人々は人の子をだれだと言っていますか。」14 彼らは言った。「バプテスマのヨハネだと言う人もあり、エリヤだと言う人もあります。またほかの人たちはエレミヤだとか、また預言者のひとりだとも言っています。」15 イエスは彼らに言われた。「あなたがたは、わたしをだれだと言いますか。」16 シモン・ペテロが答えて言った。「あなたは、生ける神の御子キリストです。」17 するとイエスは、彼に答えて言われた。「バルヨナ・シモン。あなたは幸いです。このことをあなたに明らかに示したのは人間ではなく、天にいますわたしの父です。18 ではわたしもあなたに言います。あなたはペテロです。わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てます。ハデスの門もそれには打ち勝てません。19 わたしは、あなたに天の御国のかぎを上げます。何でもあなたが地上でつなぐなら、それは天においてもつながれており、あなたが地上で解くなら、それは天においても解かれています。」20 そのとき、イエスは、ご自分がキリストであることをだれにも言ってはならない、と弟子たちを戒められた。

【序論】

去る 2 月 25 日に全国の多くの教会で年次総会が行なわれました。姉妹教会である TN 教会でも総会資料が配布され、N 先生が「2018 年度に向けて」という文章を書いておられるのが目に留まりました。私の中で大変心に残りましたので（ご本人の承諾を得て）引用させていただきます。

「私は、かつて建築の仕事をしていたわけですが、建築の中での私の専門は『構造設計』でした。『構造設計』という言葉からご想像いただけたと思いますが、私の仕事の核心は、台風が来ようが、地震が起きようが、その建物が地上に立っていられるように、建物の構造（骨組み）を設計することです。（専門的な意味で正確に言えば、ある設定された大きさの横力を建物に与える風力や地震に耐えられる設計をすること。）このことを比喩的に用いて語りますと、『構造設計』とは、広くは、ある時代を形作る思想を定めることにあたりますし、狭くは、ある一人の人間の人生を形作る考え方を定めることにあたります。次に、『構造設計』の中身を言えば『柱』、『梁』、『床』、『基礎』をそれぞれ設計することですが、敢えて言えば、それらの中で最も重要なのが『基礎』の設計です。このような仕事をしてきた私ですから、『ある時代を形作る思想』においても、また『ある一人の人間の人生を形作る考え方』においても、最も重要なものは、その思

想や考え方の『基礎になる真理』だと考えるわけです。しかもその『基礎になる真理』は、比喩的に表現しますと、私達が生きている歴史の流れの中で、どのような台風が来ようが、いかなる地震が起きようが、私達が生きている時代を支え、私達一人一人の人生を支えるような『普遍的真理』でなければなりません。」(多摩ニュータウンキリスト教会 2018 年 定期総会資料 p. 5-6)

一級建築士の資格と実績を持つ N 先生ならではの教会観／人生観であります。今日の箇所では、主イエスが、ペテロという岩の上に教会を建てると宣言しておられますが、教会の基礎とは根本的に何であるのかをご一緒に考えてまいりましょう。

【本論】

本論 1. 民衆のイエス認識

さて、ピリポ・カイザリヤの地方に行かれたとき、(16:13a)

主イエス一行は「ピリポ・カイザリヤ」という地にやって来ました。ガリラヤ湖から北へ 50km ほど行ったところにある、異邦人を中心とした地域です。元々この地はギリシャの牧童神「パン」を崇敬するところから「パネアス」と呼ばれていました。しかし、紀元前 20 年にヘロデ大王はローマ皇帝カイザルからこの地を属領に入ってもらい、町を興し、記念として大理石の神殿を建て、皇帝の像を安置しました。更に、息子ヘロデ・ピリポが町を拡張し、カイザルへのお礼に「カイザリヤ」と名付け、地中海沿岸にある同名の町と区別するために自分の名前を冠して「ピリポ・カイザリヤ」と命名したのです。この地に来た主イエスの目的は、ユダヤ人から離れ、迫り来る受難に向けて弟子たちと心一つになろうとされたところにあるでしょう。



イエスは弟子たちに尋ねて言われた。「人々は人の子をだれだと言っていますか。」

(16:13b)

これは、主イエスをご自分に関する民衆の噂を知らないということではなく、弟子たちの認識を確認するための問いかけです。

彼らは言った。「バプテスマのヨハネだと言う人もあり、エリヤだと言う人もあります。またほかの人たちはエレミヤだとか、また預言者のひとりだとも言っています。」(16:14)

ここで弟子たちは四つの噂を並べています。第一に「バプテスマのヨハネ」だと言う人々がいた。確かに、ヘロデ・アンティパスは主イエスをヨハネの再来だと言っていました。

第二に「エリヤ」。マラキ書の最後に、世の終わりの時に預言者エリヤが遣わされると書かれています（マラキ 4:5-6）。メシヤの先駆けとして到来する人物。主イエスはバプテスマのヨハネこそこのエリヤであると言っておられます（マルコ 9:11-13）。

第三に「エレミヤ」。外典の一つであるⅡマカベア書 15 章では、紀元前 2 世紀のユダヤ独立戦争の時に、エレミヤが幻の中でユダ・マカバイオスという指導者に現れたということが書かれています。

そのとき、白髪と気高さのゆえに際立ったもう一人の人物が現れたが、彼の周りには驚嘆すべき威厳が漂っていた。するとオニアが、「この人こそ、深く同胞を思い、民と聖なる都のために不断に祈っている神の預言者エレミヤです」と言った。エレミヤは右手を差し伸べて、ユダに一ふりの黄金の剣を与えたが、手渡ししながらこう言った。「神からの賜物であるこの聖なる剣を受け、これで敵を打ち破りなさい。」（Ⅱマカベア 15:13-16）

エレミヤは殉教した預言者であります、ユダヤの危機に際して現れる救助者と信じられていたのです。

第四に「預言者のひとり」。これは過去に殉教した預言者の一人が甦り、特別な使命をもって派遣されたという意味でしょう。主イエスは人々からそのように見られていたのです。

これら四つの見解に共通しているのは、誰もがイエスを「預言者」として見ていたということです。ユダヤ人にとって、預言者は重要な位置に置かれており、主イエスは確かに預言者としての職務を果たしていましたから、彼らの言っていることは部分的に正しいと言えましょう。しかし、その見解はいずれも不十分であり、主イエスをメシヤ自身として見る信仰には至っていないのです。この一線は決定的であり、主イエスがなされていることを傍観者的に眺めているだけの感が否めません。「あなたはこのイエスを救い主と信じるか」という究極の問いが投げかけられていたのです。

この問いは私たち読者にも向けられているでしょう。イエス・キリストがただ一人、私たちが罪と死から贖い出すことのできるメシヤであるならば、この方への信仰を告白するかどうかは私たちの永遠に関わる問題となります。

本論 2. ペテロの信仰告白

イエスは彼らに言われた。「あなたがたは、わたしをだれだと言いますか。」シモン・ペテロが答えて言った。「あなたは、生ける神の御子キリストです。」（16:15-16）

主イエスは弟子たちの心を知ろうとされました。そして、その信仰告白を引き出そうとしておられます。十二弟子のスポークスマンであるペテロが答えています。これは彼の一人の返答と言うより、十二弟子を代表しての信仰告白ということでしょう。未だかつて、これほど明確に主イエスを「キリスト」と告白した人はいなかった。彼の認識がまだ不十分であったとしても、この告白には重要な意味がありました。これまでの経緯を見ていきますと、「イエスはキリストかも知れない」という期待が多くの人の中で広まっていたのです。5000 人の給食の時など、群衆はイエスを王に仕立て上げようと思いました（ヨハネ 6:15）。しかし、ユダヤの権力者の圧力の前に、人々は公にイエスを認められなくなってきていた。権力の前に黙らされる人間の姿、信教の自由が脅かされる状況に口をつぐんでしまう人間の弱さと言ってもよいでしょう。世の風潮は臆病風に吹かれていたのです。そういう中にあって、ペテロは敢然とこの信仰告白をしました。多くの人が去って行く中にあって、この十二人だけは残ったのです。

「キリスト」とは、ヘブル語の「メシヤ」に相当する言葉で、「油注がれた者」という意味を持ちます。王、祭司、預言者などの任職の時に油を注ぎましたが、これはその人が神によって選ばれ、神聖化され、使命を達成するための力が与えられたことを公に表明する儀式でした。私も牧師就任時に三人の牧師から按手を受けましたが、まさに聖なる職務に召される瞬間、神の力を受けるのを感じたものです。

旧約聖書の時代が終わりに近づくと、「メシヤ」という言葉の意味は徐々に変わってきました。そこには、やがて油注がれた理想の王が現れ、神の民を外敵から救うために神から力を受け、義の王国を打ち立てるという、迫害のさなかにある民の切実な願いが込められるようになったのです（ダニエル 9:25-27）。

本論 3. 教会の礎石としてのペテロ

するとイエスは、彼に答えて言われた。「バルヨナ・シモン。あなたは幸いです。このことをあなたに明らかに示したのは人間ではなく、天にいますわたしの父です。」（16:17）

私は学生時代、説教のクラスでこの箇所を暗記させられ、抑揚を付けて講壇から語るという課題が出されたことがあります。その時に問われたのは、主イエスがどういう口調でこれを語られたかということでした。私は大きな声で喜びを込めて語ったのですが、それが幸い一定の評価を得ました。主イエスは嬉しかったのではないのでしょうか。多くの人が権力を恐れて黙ってしまう中にあって、この十二人は着いてきてくれた。そして、大胆に「あなたは生ける神の子キリストです」と信仰告白をしてくれた。

ではわたしもあなたに言います。あなたはペテロです。わたしはこの岩の上にわたしの教

会を建てます。ハデスの門もそれには打ち勝てません。(16:18)

主が最初に彼を「ペテロ」と呼ばれたのは、実はもっと前の時点、召命の時でありました(ヨハネ 1:42)。しかし、ここでは再び彼を「ペテロ」と呼びます。元々「岩」を意味する「ペトゥラ」という言葉は女性形なのですが、男性の名前とするために「ペトルロス」が当てられました。主はこのようなあだ名を用いて、ペテロを教会の礎石(基礎)にすると宣言なさったのです。

では、ペテロはどういう意味で教会の礎石なのか。彼自身のことが言われているのか、それとも彼の信仰告白のことなのか。解釈の可能性は広くありますが、エペソ 2:20 の聖句に照らして捉えてみるとよいでしょう。

あなたがたは使徒と預言者という土台の上に建てられており、キリスト・イエスご自身がその礎石です。

「**使徒と預言者という土台**」という言い方がなされていますが、これは彼らが語る真理ということになります。そして、真理とはイエス・キリストである。冒頭で引用させていただいた N 先生の文章と絡めて考えますと、教会を／人の人生を根底から形成するのはイエス・キリストであるということになる。そして、そのキリストの御言葉を取り次ぐ使徒や預言者(牧師／伝道者)によって、その土台は築かれるというのです。御言葉を取り次ぐ働きがやんでしまえば、教会は跡形もなくなってしまうか、おかしい形になっていくでしょう。福音に生き、それを宣べ伝える人がいることによって、教会は立て上げられていくのです。

わたしは、あなたに天の御国のかぎを上げます。何でもあなたが地上でつなぐなら、それは天においてもつながれており、あなたが地上で解くなら、それは天においても解かれています。」(16:19)

解釈の難しい部分が残りましたが、簡潔に申しますと、「つなぐ」とは有罪宣告、「解く」とは無罪として釈放することを意味します。つまり、罪の赦しの宣言が教会に託されたということが言われているのです。これはとてつもない権能ではないでしょうか。罪を赦すことができるのは神のみであるはず。その判断が地上の教会の罪深い人間に託されたのです(洗礼式は罪の赦しの宣言と言える)。その宣言は常に祈りをもって聖霊による導きと確信によってなされなくてはなりません。主イエスは「地上の教会」という不完全な人間の集団に、この権能を託され、今に至っているのです。

【結論】

私たちはペテロと同じ認識、同じ言葉をもって、主イエスをこの人生の王として迎え

ているでしょうか。そうであるなら、私たちの人生の基礎はイエス・キリストによって形成され始めたのです。揺れ動く世の思想の波、移り変わる価値観に揉まれてもビクともしない真理がこの人生に宿りました。この真理に立って生きるためには何が必要でしょうか。御言葉を聞き、福音に生きることです。御言葉から離れてしまつては、どんなに堅固な城壁も崩されてしまうでしょう。しかし、キリストを土台とし、御言葉に立って生きるならば、私たちはどんな状況でも持ち堪えるのです。そして、私たちにも実は驚くべき権能が与えられています。人を教え、人を養い、罪を裁き、赦しを宣言する特権が与えられているのです。教会に属している者の祝福を決して低く見積もってはなりません。

【祈り】

教会の礎、人生の基礎であられるイエス・キリストの父なる神様。私たちの人生は何によって形成されているでしょうか。教会に属し、イエス・キリストの御言葉によって、福音によって形成したく願います。やがて朽ちゆくものにではなく、永遠に変わることのない真理によって生きることができますように。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、

真理の御言葉によって、人の人生を形成し給う、父なる神の愛。

ペテロの信仰告白という土台の上に、ご自身の教会を打ち立て給うた、主イエス・キリストの恵み。

教会に属し、福音に生きることを通して、多くの人を罪の赦しにあずからせ給う、聖霊の親しき交わりが、

あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。